◇昭和二十八年度國語國文學研究発表会発表要旨

天香について

木戸清平

近代日本文学史上で郷土の先輩で從來評價されている以上に重要な人物が小宮山天香であるように思えたのが二年前の事でした。それが縁あつて令甥の方を知り資料を得て調べている中に、「斷蓬奇縁出版契約書」が發見された次第でした。これは明治文学史上、文學者の生活確立から重要問題である著作權問題から非常に貴重なものである事がわかりました。明治十九年十二月二十二日という日附は余りにも早いのです。從來は明治三十二年の著作權法施行以後、島崎藤村の「破戒」出版に際してのものや、漱石等がその開拓者と思われていた常識を變更させる程のものだつたのです。

私はこの他に明治二十年代に一無名人が文壇進出に何か紹介者がないと作品が活字にならない時、天香が樋口一葉をその初期に面倒みたという事実も今迄いわれてない事に氣附きました。

亦、翻訳文学の上で『椿姫』の日本への紹介、ユージェーヌ・シューの『パリの秘密』を翻案した『青燈夜話』（「めざまし」明91・6・19↓）等、今後残される場の問題とからんで今一度検討する余地のある事も考えました。

時間がうまく利用出來ず、発表を中絶しましたが原稿が幸い「明治大正文學研究」にのることになつております故、詳細の點は何卒これをごらんいたゞきたいと思います。

これによつて私が現在考えております事は近代日本文学研究は今後視圏の擴大を要求されている事、研究方法の方法論の問題が殘されている事、場の問題が立体的に考えられている事等です。いずれも時間がかゝる事ですが今後も努力精進して僅かづつでも歩んで行きたい念願です。

（水戸農業高等学校）

芭蕉と佛頂との友好

内野富寿

其角の書いた芭蕉翁終焉記に

「元來根本寺佛頂和尚に嗣法して、ひとり開禪の法師とよ